

令和5年度、本校では、令和4年度に引き続き、学校研究課題の研究主題を以下のように設定して、研究に取り組みました。

## 自ら学び かしこく生きる 松原っ子の育成

### ～ICTを活用した算数科における授業展開の工夫～

本校の学校教育目標、「豊かな心もち 自ら学び たくましく生きる松原の子」、目指す児童像「◎やさしく ◎かしこく ◎げんきよく」に基づき、本校の研究主題を、「自ら学び かしこく生きる 松原っ子の育成～ICTを活用した算数科における授業展開の工夫～」としました。ICTを活用することで本校の児童が、『自ら』学び、気づき考え、あきらめずに粘り強く学習に取り組み、意欲的に自分の考えを表現したり自分の考えを深め広げたりして学習内容の定着を図ることができるよう、また、教師の授業力、ICT活用の能力も向上できるようにという願いを込めて設定しました。本研究を進めるにあたり、教師も児童と共に『自ら』主体的に学ぶ姿勢をもち、必要なことや学びたいことを選び、時間や手順についても考え、『かしこく』効率よく学ぶ研究としました。

#### 【研究の実践内容】

#### 授業研究部

##### ①授業シートを活用した授業実践

※1時間の授業の目標と展開（学習活動、ICT活用）のみを1枚の授業シートとしてまとめ、授業のどの場面でどのようにICTを活用したのかをわかりやすく表した。

##### 【令和4年度】

- 1時間の授業で1枚作成。
- ゴール(目標)**を明確にし、支援の手立てを準備して授業をする。
- ICTの活用はどの場面かを明記する。
- 振り返りを記述し、授業の効果を検証する。



より授業の内容を重視

##### 【令和5年度】

- 児童の思考の流れ**を意識した導入・授業展開の工夫をする。

##### ②授業実践発表会

##### 【令和4年度】

- 各学年でICTを使った算数の授業を行い、年に2回実践の発表を行う。



授業での効果を客観的に捉える

##### 【令和5年度】

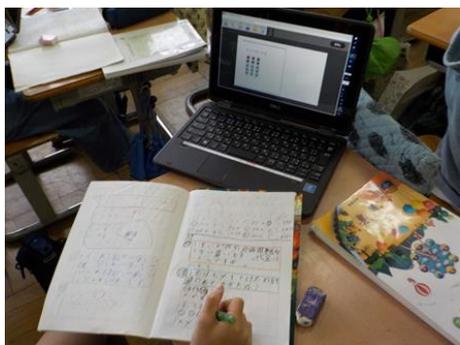
- 授業実践を**学年ブロック**で見合い、授業を見て報告する。

##### 〔第1回〕

9月25日	3年	3校時
9月26日	6年	2校時
10月6日	2年	3校時

##### 〔第2回〕

10月25日	5年	A1 訪問
11月7日	松の実	4校時
11月10日	1年	2校時



### ③授業研究会

【令和5年度】

○全員で1つの授業を参観する授業研究会を行う。

○AI訪問の算数の授業を研究に生かす。  
(第2回報告会にて指導を共有する)

○校外より指導者を招き指導を仰いだ。  
指導者 常光小学校 校長 林 義典 様

第1回 講義「よりよい算数の授業を目指して—問題解決型の授業展開—」

第2回 授業研究会

## 学習環境・調査統計部

### ①アンケート調査

○児童の実態、教師の意識、研究の検証のため、Forms を使いアンケート調査を行う。

### ③ドリルタイムの整備

○毎週木曜日の業前時間(8:25~8:40)

○学年で各クラス交互に行う。

ドリルパーク→個に応じた問題に取り組む  
「学び直し」ボタンで苦手を克服する。

プリント →表面5~10問を解き、できた児童は裏面の問題に取り組む。

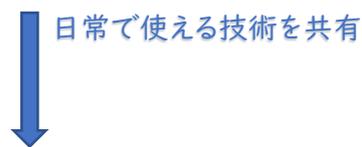
☆プリントの表面を解くのが難しい児童については、担任だけでなく、他の教室に待機している教務で指導し、補習する。

☆時間内で補習しきれなかった児童のプリントに解答への助言をかき、指導しながら返却する。

### ②アプリの使用法について研修会

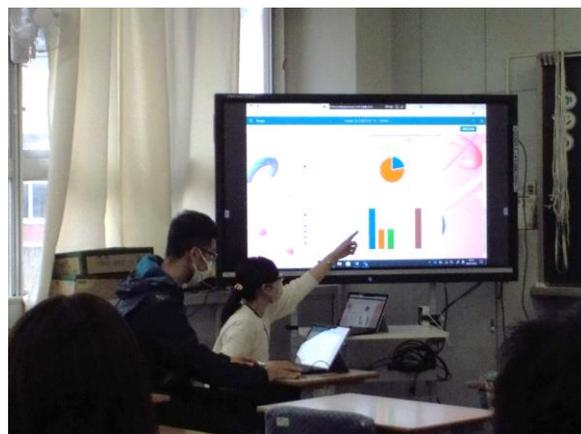
【令和4年度】

○アプリ使用法(ムーブノート、オクリンク、Forms、Scratch)の研修を分担し、自分たちで調べ、操作方法や活用例を提供しあう。



【令和5年度】

○アプリ使用法(オクリンク・ムーブノート)、書画カメラの使い方について、教員で共通理解、情報提供をする。



#### ④家庭学習での ICT 活用の推進

##### 【令和4年度】

- ぐんぐん松原週間（各学期1回・1週間）は、毎日全員が学習者用端末を持ち帰り、ドリルパークに取り組む
- 毎週1回（学年で決めた日）、パソコンを持ち帰り、学年で課題配信をする。
- 主学習として、ドリルパークを進める。



家庭の関心 UP!

##### 【令和5年度】

- 令和4年度 of 取組に加え、授業で取り組んだことで、家庭でしかできない課題にも取り組む。（mI、L等の表示や、学習した図形を見つけ写真を撮るなどの活動）

#### ⑤確認テスト検証

##### 【令和5年度より実施】

- 「前学年の算数まとめテストのような問題」をイメージし、基礎基本の問題10問を学年ごとに作成する。5月と11月に同じ問題を解き、比較検証を行う。
- 通常のドリルプリントの作成は、確認テストの単元ごとに1枚作成し、ドリルパークも類似問題を選択し配信する。
- 教師も問題を解き、つまづきやすいポイントを確認する。



1月 2日 26 みる なまえ

ドリルタイム (3学期) 4学年 No. 6

①  $560 \div 70 = 8$

②  $700 \div 90 = 7 \text{ あまり } 70$

③  $64 \div 32 = 2$

④  $45 \div 15 = 3$

⑤  $86 \div 27 = 3 \text{ あまり } 5$

⑥  $544 \div 32 = 17$

4/6

1月 19日 1くみ なまえ

ドリルタイム (3学期) 6学年 No. 6

問題 比を簡単にしよう

①  $0.5 : 0.6 = 5 : 6$

②  $2.5 : 3 = 5 : 6$

③  $\frac{5}{6} \times \frac{3}{4} : \frac{2}{9} \times \frac{18}{4} = 15 : 9 = 5 : 3$

④  $\frac{12}{5} : \frac{6}{1} = 12 : 5 = 12 : 5$

4/4

## ⑤〔確認テスト(令和5年度実施)〕

月 日 くみ なまえ

ドリルタイム (1学期) 3学年かくにんプリント

色をぬったところの大きさは、もとの大きさの何分の一ですか。

もとの大きさ

① ( )

② ( )

直角三角形はどれですか。

③④ ( ) と ( )

⑤ 10を43こあつめた数は\_\_\_\_\_。

⑥ 5700は、100を\_\_\_\_\_こあつめた数。

⑦ 
$$\begin{array}{r} 47 \\ + 54 \\ \hline \end{array}$$

⑧ 
$$\begin{array}{r} 103 \\ - 79 \\ \hline \end{array}$$

⑨ 2 cm 2 mm = \_\_\_\_\_ mm

⑩ 1 m = \_\_\_\_\_ cm

月 日 くみ なまえ

ドリルタイム (1学期) 5学年確認プリント

計算をしましょう。

①  $20 + 30 \times 5$ 。

②  $48 \div (12 - 4)$ 。

③  $6 + 4 \times 50 - 5$ 。

④  $108 - 27 \div 9$ 。

筆算をしましょう。

⑤  $608 \times 43$ 。

⑥  $84 \div 12$ 。

⑦  $0.62 \times 35$ 。

⑧  $93.6 \div 39$ 。

分数は帯分数に、帯分数は仮分数にしましょう。

⑨  $\frac{11}{3}$       ⑩  $2\frac{1}{3}$

/ 10.

### 【成果と課題】

- ・児童の学習意欲が向上した。
- ・児童のICT活用能力が向上した。
- ・ICTを活用した授業実践が増え、様々な活用方法や効果的な活用場面が見られ、授業力の向上につながった。また、算数でICTを活用する幅が広がった。
- ・林義典先生をお招きし、算数の授業で大切なことを教えていただいたことで、今年度はICT活用ばかりにとられることがなくなった。また、ICT活用にこだわりすぎず、必要な部分、効果的な部分に取り入れればよいと確認できた。
- ・オクリンクやムーブノート、Forms等のアプリの使用法がわかり、指導方法の幅が広がったことで、学習者用端末を他の教科でも授業で使用するようになった。
- ・教師間で相談したり、情報を共有したりする中でよりよい指導の仕方について考えることができた。
- ・学習者用端末を用いることで、最後まで粘り強くやり通す力がついているのかわかりにくい場面があった。
- ・算数の学習で学習者用端末は使いにくい部分もあった。
- ・継続し効果的だった取組をどうつなげていくか。
- ・ICT活用の有無に関わらず、児童に効果的な学びの機会と場を作ることがこれからも必要である。

この2年間の研究を児童にとっても教師にとっても、ICT活用能力向上のチャンスだと捉え、前向きに研究に取り組んできました。自ら(自分たちで)必要なことを学び、かしくく(無理せず)に効率よく)研修を進めてまいりました。研修を進めるにつれ、ICTは私たちにとって便利で有効な機能を見せてくれるようになりました。研修を通してまさに、「学ぶことのよさ」を教師自身が身をもって知ることができました。

さらに、研修を経て「大きな学び」もありました。それは、いくらICTが使えるようになっても、私たち教師の「授業力」がなければ、本当の学習効果は得られないということです。それらのことが言葉だけでなく実感として分かったことは、ICTを使ってみてこそその大きな成果です。

本研究の成果を、明日からの授業に生かすことで、これからも松原っ子の育成に励んでまいりたいと思います。